



成果情報

- 大麦「さやかぜ」
- 夏秋トマト品種
- 花きの短時間冷房
- イチゴの育苗技術

品種紹介

No. 52 「広かんらん」

現場の将来を見越した農業技術開発

農業技術センターでは、昨年度から「攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業」に参画し、農事組合法人シトラスかみじまにおいて「ミカンの主幹形仕立てを基盤とした省力・軽労型生産技術」、農事組合法人ファームおだにおいて「飼料用米の鉄コーティング直播栽培や野菜等の浮き楽栽培による軽労・効率的作業管理技術」の体系化及び普及実用化に向けた実証研究を行っています。さらに、「戦略的イノベーション創造プログラム」にも参画し、次世代農林水産業創造技術の開発を目指して「持続可能な農業生産のための新たな総合的植物保護技術」の研究にも取り組んでいます。

また、農業技術センターでは、優先して取り組むべき研究開発の方向性を見定めるため、県民や業界等からのニーズ、本県農業の現状や国・県の施策動向等を踏まえ

て、組織内で意見交換し、当センターの目指す姿、それを実現するための取組等を明確に描く活動を開始しました。

今後、①広島ブランド产品及び製品の生産・流通・消費拡大に貢献する技術、②規模拡大と所得向上に繋がる重点品目の高品質・低コスト・多収化、省力・軽作業化及び周年安定供給技術、③異分野との融合で革新的農業システムの構築を図り、匠の技を可視化し継承を容易にする技術、④県民の安全・安心などのニーズに応える技術の提供により、本県農業の核となる担い手の皆様に支援できるように、より高い貢献と存在感のある農業研究機関を目指します。

今後とも、当センターの活動への御理解と一層の連携を宜しくお願いいたします。

(センター長 新田 浩通)

成果情報 尿素の3月上旬重点施肥で大麦「さやかぜ」の収量30%増加

大麦「さやかぜ」の栽培において、3月上旬に尿素を一括施用することで、慣行と比較して30%以上増収する施肥法を開発しました。

慣行分施では、窒素を基肥として10月下旬に6kg/10a、1月下旬に2kg/10a、3月上旬に2kg/10a施用しますが、本施肥法は収量に大きく寄与する3月上旬のみに10kg/10a施用します。肥料は散布量を少なくできる尿素を使用します。

本施肥法により、成熟が1～2日遅くなりますが、穂数が多くなり増収します。倒伏と検査等級は同程度です(図1、表1)。

今後、大麦の栽培面積が大きい集落法人への本施肥法の導入が期待されます。

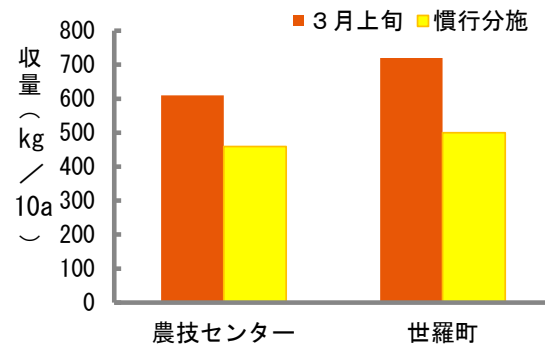


図1 「さやかぜ」の収量

表1 「さやかぜ」の生育と品質

場所	施肥法	成熟期 (月.日)	稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	倒伏	検査等級
農技センター	3月上旬	6.01	76	412	微	1等
	慣行分施	5.30	77	359	微	1等
世羅町	3月上旬	6.07	87	503	無	2等
	慣行分施	6.06	85	393	無	2等

(栽培技術研究部)

成果情報 夏秋トマト品種「りんか409」の増収を目指した施肥量と着果数

夏秋トマト産地では、夏季の高温・強日射による収量、品質低下の少ない品種「りんか409」の導入が進んでいます。昨年度、さらなる増収を目指して肥培管理方法と果房あたりの着果数を検討しました。

施肥量は、現行の養水分管理指標(総窒素量20g/株)の1.25倍とすることで適正な樹勢が維持され、障害果の発生が少なくなり増収しました。

また、果房あたりの着果数は、慣行の最大4果から最大5果に増やすことで増収しました(図)。着果数を常時5果にすると果房段位別の収穫果実数の変動が大きいため、本年度は、着果数を5果にする生育時期を検討し、安定的な増収を目指します。

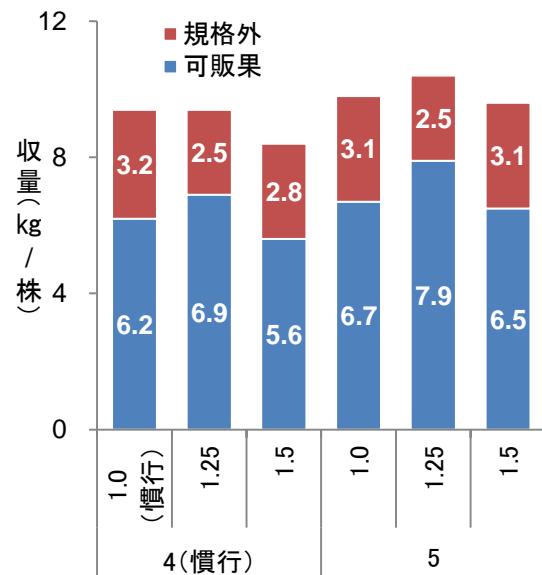


図 施肥量および果房あたりの着果数が収量に及ぼす影響 (2014)

(栽培技術研究部)

成果情報 日の入り後の短時間冷房で花きの高温障害を軽減する

花きの施設栽培ではヒートポンプの導入が進んでいますが、経営安定のためには稼働費の削減が課題となっています。当センターは、終夜冷房よりも40%電力消費量の少ない夜間冷房方法を見出しました。

バラの場合、冷房は日の入りから4時間だけ21℃で行い、冷房終了後は施設を開放することで湿度の上昇による病害発生を防止します。この冷房方法によって、終夜冷房と同等の切り花を収穫できました(表)。詳細やバラ以外の花き品目については、当センターのホームページを参照ください。

本研究は農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業(H24~26)を活用して行いました。

表 21℃の冷房時間帯とバラ「サムライ⁰⁸」の切り花本数および品質(2013)

冷房時間帯 ²	切り花数 (本/株)	切り花長 (cm)	切り花重 (g)	花高 (mm)	花弁数 (枚)
なりゆき	3.8	51	30	44	31
日の入り後	3.8	62	46	47	36
日の出前	3.8	61	44	46	33
終夜	3.7	63	47	47	34

² なりゆきは無冷房、日の入り後は日の入りから4時間、日の出前は日の出まで4時間、終夜は日の入りから日の出まで行った

(栽培技術研究部)

成果情報 ネイキッド培地を利用したイチゴの育苗技術 -実用化を目指して-

ネイキッド培地は、培地を繊維で成形したもので、使用時にポリポットが不要です。

培地の表面が剥き出しのため、水分の蒸発が盛んになり、その結果、培地の温度が低下します。

真夏に育苗するイチゴでネイキッド培地を用いると、培地温度の低下により花芽形成が早まり、果実の収穫は約半月早くなります。県内でもネイキッド培地を活用することで、イチゴの単価の高いクリスマスシーズンに出荷量を増やすことができます。更に、底面給水装置を用いるとかん水が容易になります。

ネイキッド培地は、みのる産業(株)、京和グリーン(株)から「エクセルソイル32」の商品名で販売されています。



写真1 商品化されたネイキッド培地



写真2 ネイキッド培地で育苗したイチゴ苗
苗質もポリポットと同様

(栽培技術研究部)

ジーンバンクで保存している特徴のある品種 (52)

広かんらん

甘みが強く柔らかい夏播きキャベツ

広かんらんは明治末期から大正初期にかけて、当時の賀茂郡広村（現在の呉市広）出身の篤農家「玉木伊之吉氏」を中心とした数名の農家によって育成されたもので



す。サクセッションとパンターゴの自然交雑の後代から選抜育成されたことになっていますが、生態的にはアーリーサンマーの系統になります。栽培は育成地の広を中心とした呉市で昭和12年～14年に約40haの記録がありますが、その後第2次世界大戦の勃発により面積は急激に減少します。戦後は昭和30年代に再び40haを超えるまでになりますが、今度は萎黄病を中心とした土壤病害の多発により面積は殆どゼロになりました。最近再び復活の兆しが見られ、呉市農業振興センターの指導で、本年度は1haを超える面積になりそうです。

この品種の特徴は何といってもその柔らかさと甘みの強さです。生食に最も適しますが、ロールキャベツや野菜炒め、お好み焼き等の材料としても絶品です。球の重さは1.5～2.0kgと夏播き品種としては小型です。暖地では8月上旬播きで3月まで収穫が可能ですが、寒さには強くないので、中部地帯では7月中旬播きの年内穫りが無難です。しかし、有機質肥料を用いた少肥栽培では3月穫りも可能なことが確かめられています。

一般財団法人 森林整備・農業振興財団 農業ジーンバンク技術嘱託員 船越建明

農業技術センター
ホームページをご覧ください。

農業技術センターホームページでは、センターニュースをはじめ、研究成果情報など最新の情報を提供しています。また、お問い合わせの多い各種案内、研究紹介など、お役にたつホームページとしています。インターネットの接続環境があれば、いつでもパソコンでご覧いただけます。ご活用ください。

広島県 農業技術センター

検索

<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/30/>



(問い合わせ先)

〒739-0151 東広島市八本松町原 6869
総務部 ☎082-429-0521
技術支援部 ☎082-429-0522
栽培技術研究部 ☎082-429-3066
生産環境研究部 ☎082-429-2590

〒739-2402 東広島市安芸津町三津 2835
果樹研究部 ☎0846-45-5471

農業技術センターNews No. 118
編集発行



農業技術センター
平成 27 年 5 月 1 日

お問合せ・ご意見は、技術支援部までお寄せください。
メールでもお待ちしております。

E-mail ngcgijutsu@pref.hiroshima.lg.jp